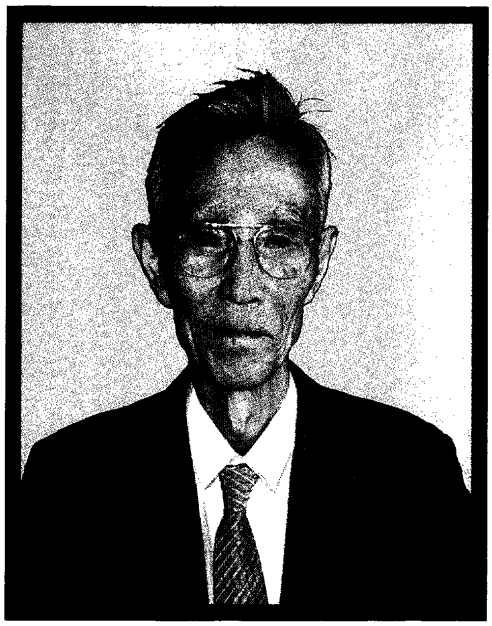
Pesticide Science Society of Japan

日本農薬学会誌 **25**, 199–200 (2000)



福永一夫先生を悼む

(1917～2000)

本学会初代会長，福永一夫先生は，平成12年2月10日早朝，多臓器不全のため82歳の生涯を閉じられました．戦後の混乱期から40余年に亘って，試験・研究業務を主軸に，生涯を病害虫の防除と農薬の発展に捧げられ，わが国の植物防疫体制の基礎の確立に果たされた先生の偉大な功績は，長くその歴史に残るものと信じます．先生のご逝去は，日本農薬学会はもとより，日本応用動物昆虫学会をはじめ広く関連学会および関連分野にとって，きわめて大きな損失であり，痛惜に堪えない次第であります．

先生は大正6年4月9日滋賀県でお生まれになり，第三高等学校を経て，東京帝国大学農学部に入学，昭和15年3月農芸化学科をご卒業後，直ちに農林省農業試験場に入省され，研究業務に従事されました．一時兵役に服されたあと，昭和24年10月同試験場農薬部長代理に就任され，翌25年4月，改組により農林省農業技術研究所が設立された時，同研究所病理昆虫部農薬科長に就任されました．昭和47年8月に農林省を退官されるまでの20余年間，一貫して農薬に関する試験・研究業務に従事され，常にその指導的立場で，新農薬の導入，農薬の有効利用，新農薬の創製に力を注がれました．

一方，昭和38年9月，理化学研究所に農薬部門が新設された時，同研究所農薬第一研究室(昭和42年6月より昆虫薬理研究室と改称)の主任研究員を兼務され，新農薬創製を目指して，薬物の作用機構と代謝研究を展開されました．農林省退官後は，理化学研究所専任となり，同研究室主任研究員および生物試験室の主任研究員を兼務され，新農薬創製に向けて，さらに広い視野から，新しい作用機構に基づく薬物の開発に意を注がれました．

昭和53年3月理化学研究所を定年退職され，4月より財団法人残留農薬研究所技術顧問に就任され，その職務を果たされております．

先生が農林省農業技術研究所に勤務された当時は，戦後の苦難に満ちた時代でした．中でも食糧の確保は，国をあげての一大プロジェクトで，欧米から次々と新しい農薬が導入され，その中からわが国の農作物に適したものが選ばれた結果，単位面積当たりの収量は急速に伸びた時代でした．しかし，一方ではいつまでも外国に依存する事への反省もあり，また人間や環境に対する農薬の悪影響も社会問題化するようになりました．そのような背景から，このプロジェクトの最前線で活躍する先生は，国産で，しかも人間や環境に優しい農薬の創製のために，抗生物質に目を付けられました．イネの最大病害であるいもち病は，戦後の食糧不足の一大原因で，当時有機水銀剤による防除が功を奏し，問題は一応解決してはいましたが，水銀を環境中に放出することが大きな問題となっていました．昭和28年，先生は東京大学住木教授と共同して，農業用抗生物質の研究に着手し，殺菌性を有するブラストサイジンを発見されました．このブラストサイジン生産放線菌はストレプトミセス・グリセオクロモゲネス・フクナガと命名されております．この研究により先生は，昭和33年3月東京大学より農学博士の学位を授与されました．その後，多くの人連の協力を得て，ブラストサイジンSとして実用化されております．ブラストサイジンSが農薬として登録された昭和36年は，丁度有機水銀剤が環境問題で使用中止の事態に立ち至ろうとする時期でもあったため，ブラストサイジンSの登場は有機水銀剤の使用中止を早めるとともに，それ以後の低毒性農薬の開発研究に一層の拍車をかけた点で意義深く，これに深く関わった先生の功績は高く評価され，先生は昭和37年度日本農学賞，昭和38年度農林大臣賞の栄に輝いております．

NII-Electronic Library Service

Pesticide Science Society of Japan

理化学研究所では，薬剤の作用機構および代謝研究を通じて，より低毒性の農薬の開発を目指すと共に，従来の毒物による害虫防除から，昆虫の生理や生態の攪乱による害虫防除へと，発想の転換を強調されました．当時国内には，大規模な生物試験，昆虫飼育施設がなく，化合物のスクリーニングは外国に依頼しなければならない状態にありましたので，大規模なスクリーニングと新規作用機構に基づく害虫制御剤開発研究を目指して，昭和45年に理化学研究所にインセクトロン棟が完成しました．先生はこの施設を利用して，ニカメイガ，ツマグロヨコバイ，ウンカ類など代表的な農作害虫の大量飼育と昆虫のホルモンやフェロモンなどをターゲットとする害虫制御剤の基礎研究および生物検定を押し進められました．この研究成果はその後の低毒性害虫制御剤やフェロモン剤の開発につながっており，現在も総合的害虫管理や発生予察の一環として広く取り入れられております．

先生は，わが国の農業発展のために，昭和50年に設立された日本農薬学会の初代会長に就任され，卓抜した企画力と実行力を以て設立初期の種々の困難を克服し，組織の拡大と経済的基盤の確立に努力されました．現在では本学会の基盤は整い，数多い学会の中の代表的な一つとして活動しておりますが，今日の隆盛に至る基礎を築いた先生の功績は極めて高く評価されております．また，先生は国際会議開催にも非常に積極的で，日本農薬学会が設立されるまでは，日米セミナーほか多くの国際会議を主催し，わが国の農薬界の国際化と若手研究者の育成に意を注がれました．

その他，先生は日本学術会議植物保護研究連絡委員会（昭和32年～38年），環境庁水質保全局農薬残留対策調査技術委員会（昭和48年～52年），環境庁水銀汚染調査検討委員会（昭和48年～49年）などの専門委員を務められ，植物保護や環境保護政策のための重責を果たされました．これら先生の多年のご功績に対しては，昭和62年春に勲三等瑞宝章が授与されております．

先生は頭脳明晰で，理路整然とした先生の理論展開は，私達に常に信頼と敬服の念を抱かせ，また先生の「先見の明」には常に感心させられました．これも先生が先進諸国の事情に明るかったためと思われます．先生が残された数々の業績に，先見性の一端がよく伺えます．

世間の「農薬ばなれ」から，大学や企業で「農薬」の語が次々と消え，日本農薬学会でも名称変更が真剣に討議されたことがありました．その時先生はいつも「名より実を」を持論として，農薬の質を高める事と農薬の必要性を広く世間に広める啓蒙活動に意を注ぐことを主張されておられました．先生の農薬に対する情熱が，今後の農薬科学と農薬学会の発展をさらに高めることを信じつつ，安らかにご永眠下さいますようお祈り申し上げます．

なお，2月10日正5位に叙せられましたことを申し添えます．

東京農業大学総合研究所
満井　喬（理化学研究所名誉研究員）

NII-Electronic Library Service